



明治29年(1896)に下新川端町(博多区)が制作した2番山笠の写真。〔松熊功資料〕

## 第36回新収蔵品展

# ふくおかの歴史とくらし

令和6年10月9日(水)～令和6年12月22日(日)

企画展示室1～4

### 開催にあたって

福岡市博物館は、開館の7年前(昭和58・1983年)の博物館建設準備室発足以来、考古・歴史・民俗・美術の各分野の資料収集を続けてきました。寄贈や寄託、購入によって収集した資料の数は19万件以上にのぼります。

収集した資料を後世に確実に引き継ぐとともに、展示や研究に有効活用するため、当館では、新たに収蔵されるすべての資料について調査と整理を行い、そのリストを『収蔵品目録』として刊行し、公式ホームページにおいて「福岡市博物館所蔵品データベース」を公開しています。また、目録刊行にあわせて、博物館の資料収集活動を広く市民の皆様を知っていただくため、『新収蔵品展』を開催し、新たに加わった資料をご覧いただける機会を設けています。

36回目を迎えた今回は、『収蔵品目録』第39号に掲載した令和3年度収集資料2548件の中から「ふくおかの歴史とくらし」に関わる約80件の資料を厳選し、『福岡の歴史と記録』『近現代のふくおか』『くらしとまつり』『芸能と美術』の4つの章で紹介いたします。

本展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。この展覧会がふくおかの歴史と人びとのくらしについて、より一層の関心を寄せていただく機会となることを祈念するとともに、福岡市博物館の資料収集活動に、ご理解とご協力をいただける機会となれば幸いです。

## 一 福岡の歴史と記録

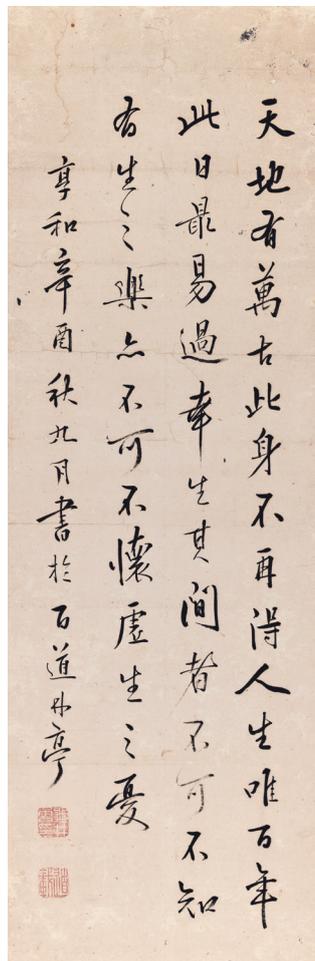


(上) 筥崎宮(東区)の境内から発見された仁王般若波羅蜜經を写した36枚の瓦経の一部。瓦経とは仏教の經典を瓦ほどの大きさの粘土板に刻み焼いたもの。〔筥崎宮資料(追加分)〕



(上) 西川善兵衛が注文した具足の仕様を記した、延宝2年(1674)の目録を、福岡藩の御料理方をつとめた高橋家4代当主・直房が書き写したものの。〔福岡藩御料理方高橋家資料〕

(左) 福岡藩の儒学者・亀井南冥の書。南冥は藩校・甘棠館の館長をつとめた。同館の廃止後は唐人町の屋敷に住んだが、屋敷の火災で百道松原に引っ越し、新たな屋敷として「百道林亭」を作った。この書は南冥が「百道林亭」で認めたもの。〔許斐友次郎資料〕



(右) 2代福岡藩主黒田忠之の側近・小河久太夫にはじまる小河家伝来の甲冑。兜は桃形に、小河家の家紋を鷹の羽をあしらった脇立、日輪の描かれた軍扇の前立をそなえる。室町時代後期から安土桃山時代に流行した当世具足で五枚胴。〔小河愛次郎資料〕



(上) 朱塗りの重箱。明治43年(1910)に福岡市西中洲で開催された第13回九州沖縄八県連合共進会に出品された。漆を着色、成形することで立体的な造形をつくる堆錦という沖縄の伝統的な技法を用いる。〔半田郁子資料〕



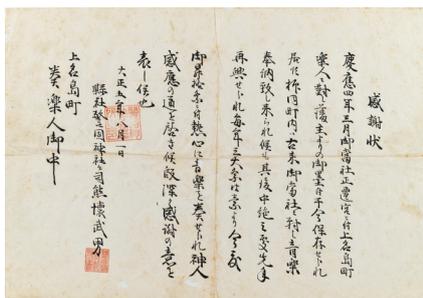
(上) 大正時代に早良郡西新町（早良区）で撮影された集合写真。建設された鳥居は、大正2年（1913）に百道松原から麓原に遷座した紅葉八幡宮のもの。〔春日得資料〕



(上) 明治時代から昭和時代前期にかけて、福岡・上名島町（中央区）でガラス製造業を営んでいた小川家に伝来したガラス製の杯。明治初年にガラス製造業を始めたと言われる小川六三郎の作と伝わる。〔小川幸子資料〕



(上) 福岡藩書道方をつとめ、独自の筆法を生み出した二川相近の書を、板額にして飾ったもの。相近は筑前各地の仏閣等の額も依頼に応じて揮毫した。〔川副剛之資料〕



(上) 警固神社から氏子である福岡・上名島町の楽人に贈られた感謝状。大正5年（1916）に警固神社の社格昇格祭で楽人が熱心に音楽を演奏したことに感謝の意を示す。〔小川裕夫資料〕



(上) 筑紫郡席田村（博多区）にあった席田尋常小学校の学校日誌。学校で行われた出来事を簡潔に記した記録。〔大谷家文書・購入資料〕



(上) 昭和21年（1946）から翌年の間に撮影された福岡市内の写真。撮影者は米軍の教育機関に勤務したアメリカ人。終戦後の瓦礫が残る市街地の様子がうかがえる。〔Gray Wright Waldorf collection〕



(上) 昭和26年（1951）11月に制定された福岡市立周船寺小学校（西区）の校歌の楽譜。作詞者は歌人・徳永俊夫。作曲者は福岡教育大学の教官で作曲家の森脇憲三。〔森脇憲三資料〕

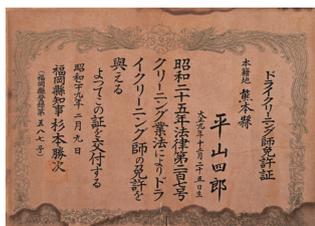


(上) 明治時代に発行された衆議院戦時議会記念絵はがき。明治27年（1884）に日清戦争の指揮のために広島城内に設置された大本営に馬車が到着する場面を描く。〔星野隆資料〕

## 二 近現代の福岡



(上) 平成元年（1989）3月から9月にかけて地行・百道埋立地で開催されたアジア太平洋博覧会で使用された業務用車両入場証。〔小澤憲二資料〕



(上) ドライクリーニング師の免許証。ドライクリーニング師は、石油質溶剤を使って繊維・皮革製品をそのまま洗濯する事業者に1名以上置かれる専門職。〔平山なな子資料〕



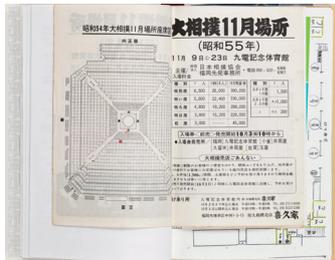
(上) 第2次世界大戦中、北京にあった華北交通株式会社が旅行者向けに発行した雑誌。昭和17年（1942）10月発行号では、中国・山西省を中心に名所などを写真付きで紹介する。〔安倍光正資料（追加分）〕



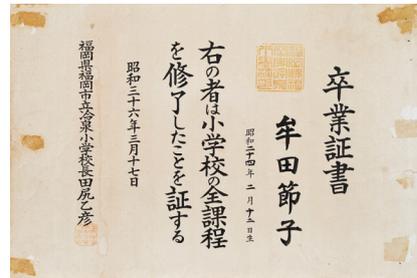
(上) 中洲検番が発行した、中洲の芸者の名前を一覧にしたパンフレット。代金が高い順番に芸者の名前を記す。〔木村和男資料（追加分）〕



(上) 昭和 57 年 (1982) 3 月から 5 月にかけて大濠公園・舞鶴公園 (中央区) で開催された「ふくおか'82 大博覧会」の会場案内図。この博覧会は未来の暮らしを紹介する各パビリオンが設けられた。〔水口健吾資料〕



(上) 昭和時代から平成時代にかけての大相撲九州場所の入場券の半券やパンフレットを集めたもの。旧会場の見取図ほか各種貴重な印刷物が含まれる。〔清岩寺資料 (追加分)〕



(上) 冷泉小学校の卒業証書。同校は明治 6 年 (1873) 創立の小山小学校を始まりとする。数度の統合の結果成立した呉服尋常小学校が上川端 (博多区) に移転した際に冷泉尋常小学校に改称した。〔牟田節子資料 (追加分)〕



(右) 江戸時代に廻船業で栄えた西区宮浦の津上家に伝わった金刀比羅宮の祈禱札。金刀比羅宮は海上交通の守り神として信仰され、海事関係者の崇敬を集めていた。〔津上禮三資料 (追加分)〕  
(左) 博多おきあげでつくられた自画像。おきあげは押し絵の一種で、型紙に綿をのせて厚みをつくり、布で包んで縫い合わせてつくるもの。〔小串ズノ資料 (追加分)〕



(下) 大正 13 年 (1924) につくられた酒造業者の引札。左に旧暦、右に太陽暦が印刷されている。〔上田家資料〕



(上) 東区松崎の多々良地区で使用されていた害獣除けの案山子。〔松原ひとみ資料〕

三  
く  
ら  
し  
と  
ま  
じ  
り



(上) 西区北崎で使用された盆提灯。福岡地域では、初盆の際に親族が博多提灯とよばれる大型の提灯を贈る風習がある。〔井手重光資料〕



(上) 西区玄界島で魔除けに使用されたハリセンボンの剥製。〔宮川安隆資料 (追加分)〕



(上) 博多瓦町 (博多区) 出身の関守氏 (1916-2003) が博多祇園山笠の際に着用した岡流の当番法被。〔関守資料〕



(上) 令和 3 年 (2021) の博多祇園山笠のポスター。新型コロナウイルス感染症の影響で櫛田神社の飾り山笠の写真を使用する。〔日高三朗資料〕



(上) 博多区堅粕で使用された、衣類や紙などのシワを伸ばすための電気裁縫機。〔榎美智子資料〕



(上) 昭和 40 年代にタイガー計算機株式会社が製造した手廻し式計算機。〔松村緑資料 (追加分)〕



(上) 昭和時代に作られた博多鉢の飴切鋏。〔松尾孝司資料 (追加分)〕



(上) 手動式の按摩器。木製で、胴部のハンドルを回転させて振動を起こす。〔後藤耕二資料〕

(上) 寶満神社 (早良区重留) の夏季大祭の際に金屑川沿いに設置し、酒・魚・塩を供える棚。〔寶満神社資料〕

# 四 芸能と美術



(上) 二代目三苦主清が江戸時代後期に描いた山笠図。博多石堂流の掛町が仕立てた、古代中国の越国での凶賊退治を題材とする山笠を描く。〔購入資料〕



(上) 『日本書紀』に記された野見宿禰と當麻蹶速が相撲をとった故事を題材に描いた板絵馬。〔豊田大資料〕



(上) 結婚式、茶道や華道の習い事など、ハレの日に着用された振り袖。赤地に鶴、松、菊、波などの文様があしらわれる。〔五十川静子資料〕



(上) 博多出身のコメディアン・小松政夫氏(1942-2020)の芸のひとつ「しらけ鳥音頭」で小松氏が右手に差し持ったパペット。〔小松政夫資料〕



(上) 江戸時代後期の福岡で活躍した女流文化人・亀井少菜(1798-1857)による菊図と漢詩の三幅対。〔船越正子資料〕



(上) 余白をとった金地に、色とりどりの撫子とさまざまな蝶を描いた屏風。福岡で創立された前田証券の日田営業所の研修室に展示されていた。近代福岡の経済人による美術愛好の様相を示す資料である。〔前田満子資料(追加分)〕



(上) 昭和時代に製作された、中世博多の街並みを描いた非常に大きな絵。実在が不確かな「袖港」を描き、唐船などの帆船を配することから、貿易を中心に栄える博多を絵の主題とする。福岡市出身の日本画家・松尾晃華の作。〔高橋郁資料(追加分)〕



(右) 幕末に活躍した復古大和絵派の絵師・浮田一蕙(1795-1859)による競べ馬を描いた絵。浮田は京都に生まれ、田中訥言に師事して土佐派の古法を習得した。〔神谷守正資料〕



(左) 東区箱崎で90年以上表具店を営んだ合屋家が支援していた日本画家・小野茂明(1897-1994)と太宰府の絵師・萱島秀峰(1901-73)、書家・古賀井卿(1891-1982)による合作の書画。〔合屋翠雲堂資料(追加分)〕

福岡市博物館 千八四一〇〇一  
福岡市早良区百道浜三丁目一番一  
☎〇九二一八四五五〇一一

寶満神社氏子代表

筥崎宮

清岩寺

高橋郁

川副剛之

安陪等思

松熊功

平山なつ子

後藤耕二

神谷守正

豊田大

井手重光

宮川安隆

五十川耕子

小川愛次郎

水口健吾

松尾孝司

竹尾啓助

半田郁子

刀根真理子

春日得

黒田亮太

黒田亮太

小串路子

Gwendolyn B. Waldorf

小玉那津子

合屋善克

松原ひとみ

松崎朋子

星野隆

児嶋祐子

小川幸子

山口照子

牟田節子

津上公

松村緑

神谷美恵

許斐友太郎

榎美智子

日高三朗

小澤憲二

木村和男

前田良幸

ご協力いただいた方々  
(寄贈・寄託者名/順不同 敬称略)